

名港水族館 アカウミガメ回遊研究

潜水の深さ、水温も調査へ

北太平洋におけるアカウミガメの回遊経路を調べる名古屋港水族館（名古屋市長区）の共同研究が2年目に突入した。来月中旬に2歳弱の28匹を海上で放流。今年は位置情報に加え、潜水の深さや水温が分かる送信機も取り付け、より詳細な分析を目指す。

研究には他に米国、メキシコ、ニュージーランドの機関が参加。アカウミガメが水温上昇に伴い、北太平洋中部から北米西海岸に向けて回遊するという仮説を5年間で検証し、効果的な保護活動につなげる。

昨年は放流した25匹のうち、7匹が北米大陸に向けて泳ぎ、3匹が西海岸にたどり着いた。エルニーニョ

現象による海水温上昇の影響を受けたとみられ、米スタンフォード大のラリー・クラウダー教授（74）は「海水温の高い場所には餌が多く、経路とすることが多い」と解説する。

19日には、同館で研究者や学生が40秒前後のアカウミガメの甲羅に、送信機を樹脂などで装着した。クラウダー教授は「今年はラニーニャ現象による海水温低下が予想され、北米大陸に向かう個体はいないと思う」と推測。同館の森昌範さん（49）は「国際チームと連携して、日本代表の水族館として携わっていきたい」と話した。

（赤塚一輝）



アカウミガメに送信機を装着する研究者ら。名古屋港水族館で

6/26 中日朝刊